

## 卷頭言

# 環象の顧慮

熊本大学名誉教授  
理学博士

四宮知郎

旭日を浴びて情景に清新の爽氣を振起しました  
一冬の奮闘が報われたのであります。西日本ではまだ雪が残ります。  
雪中、絶壁、険峻な山脈を越えて、難波へ向かう。  
極度の寒さ。まるで北極の九十九度の氷原とでも思ひます。  
かつて日本撮影社はミラヤ連峰を越えやたら  
鶴群の映写に成功しました。一峰一峰、親子仲良し  
この鳥はまた大群となり相撲でも渡りの旅をします。  
平和の鳥が風雪に堪え、悲壯感を高めと題します。

曉	欲	嚴	羣
唳	昇	寒	鶴
聲	三	氷	慄
高	萬	壁	慄
待	三	猛	絶
曉	千	颶	嶺
光	足	狂	航

晨題 旅

迎陽 乙丑元日

賀状（迎陽は年賀の意もある）の一部を揚げ、まづ祝意を表する。歌御会の題「旅」にちなむ詩に詠じた鶴は日本の丹頂ではない。タンチョウ Japanese Crane (Grus japonensis) は古来わが国で最も親しまれてきた。新紙幣にも、エゾマツなどを遠景とする湿原に、愛を唱和する雌雄（左鳥が雄）が極めて清爽精緻な描写で示されている。タンチョウ撮影の第一人者林田恒夫さんの助言ときくが、黒い風切羽と短い後指は、古来の日本画家の語りをよく指摘している。黒くて一見柔和な眼つきや典雅清楚な姿には優しさを感じるが、自然の厳しさに対し、その強さを翅力にはもちろん嘴や脚の力に秘めている。怜俐で用心深く人の愛護に甘えないこの鳥の習性も、一時絶滅を心配された数より 350羽と増加し、渡りも行はないで北海道の湿原に一応落ちついている。まづ環境に適応したといえよう。しかし一方、鹿児島出水市に渡来するナベヅルは数千羽とこの種の大半が集まるので、一朝環境の悪化による被害がおそろしい。

さらに環境対応の適否二例を加える。庭木の剪定間隔で知ったこと—木木の間隔を思いきり広げて日当たり風通しをよくしたら、翌年はこれらの木木はずっと大きくなかった。旧冬、大阪のデパート屋上で販売の錦鯉を見る。約2m四方深さ40cm位の水槽に、体長50cm級の魚が過密に泳いでいる。通気はしてあっても苦しんでいるかと思ったら、極めて慣れたもので、巨大な老魚が口をあけて差し出す人の指をしゃぶっていた。全く驚いたが環境の対応は不良といいたい。

環象という語がある。環境に及ぼす種種の現象を示す。過密に生物の生息する地球上にあっては、この問題を究め適正に均衡ある処置をすることこそ、いよいよ肝要なときとなって来た。

熊本県では水俣病対策の一として、水俣湾の水銀汚泥の浚渫が進捗している。数年後これが完成したとき何が起きるか？将来は考慮に入れるべき問題である。